

私の古典学習法

本誌審査委員 石坂 雅彦 〈前編〉

古典学習も何も無い。好きでひたすら書いた。

夢中で書く、その情熱が眼を頭を目覚めさせてくれる。それが古典の素晴らしさや価値を教えてくれる。

一 出発点

書の古典、高校の書道の授業で聞いて漠然と「昔のいい書」という程度は知っていた。それ以上の特別な思いも考えもなかった。

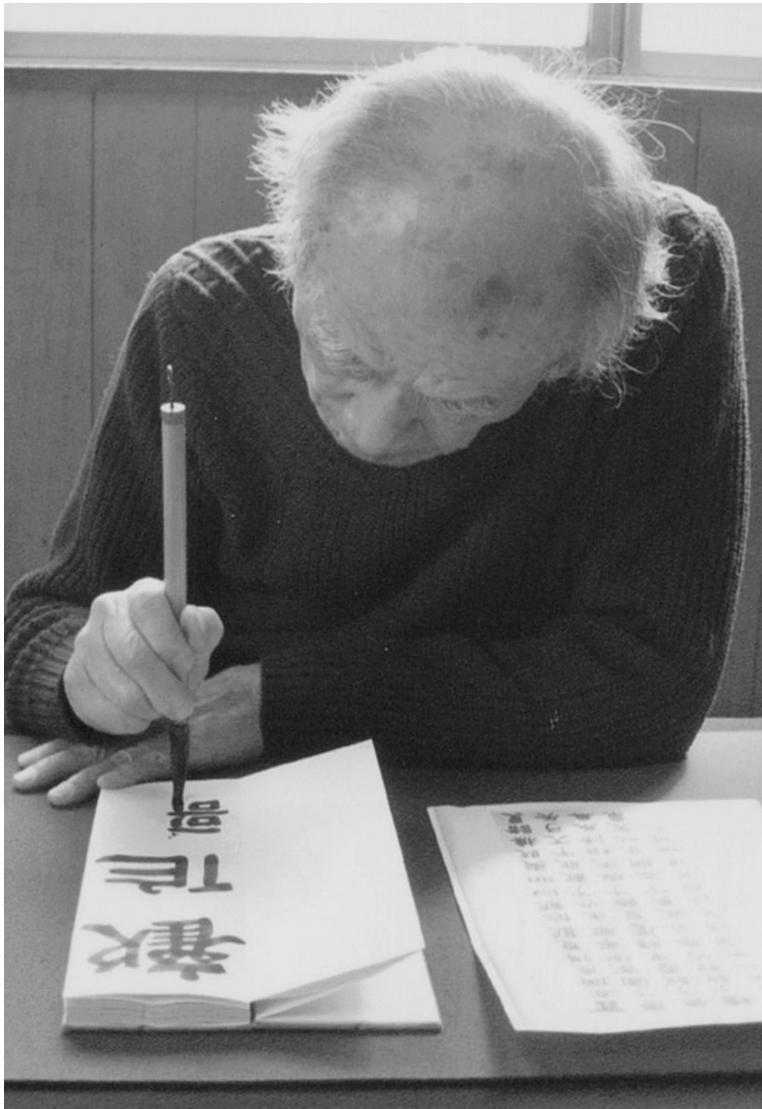
書に興味を持ったのは、高校生の時日展会場で西川寧の金文作品「老子語」に出会ってからだ。その作品の魔力に取り付かれたかのように書の道に進むことになった。というか決めた。

大学一年の五月に、先輩の伝手を頼りに西川寧の門を叩いた。運よく入門が許され、

「どういう書が好みなんですか？」

「篆書が好きです。先生のような金文が書きたいです」

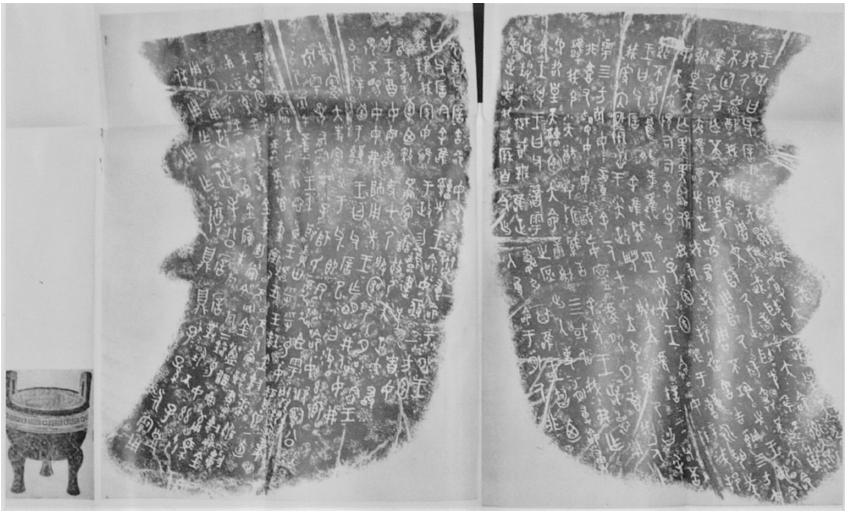
「篆書、金文といつても広うござんす。何を勉強しますか？」



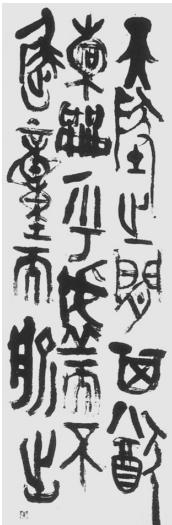
「毛公鼎でお願いします」

「まあ、いいでしょう」

となつた。「毛公鼎」と答えたのは、教科書等私が眼を通すことができた本によく出ていた。



西川寧「老子語」



■プロフィール

石坂 雅彦 (いしざか・まさひこ)
字 (あさな)
雅号 (よしのん)
松環居 (じょうかんきょ)

〈略歴〉

昭和20年 神奈川県茅ヶ崎市に生まれる
昭和43年 横浜国立大学教育学部美術科書道卒業
平成20年 第25回読売書法展読売準大賞(二回目)受賞
平成26年 改組新第一回日展特選(二回目)受賞
令和3年 第八回日展審査員就任。
実践女子大学・フェリス女子大学・横浜国立大学・
田園調布女子大学・日本大学(文理・藝術)非常勤
講師歴任。

〈現在〉

謙慎書道会常任理事・読売書法会常任理事・日展
会員・全日本書道連盟評議員・神奈川県美術展委員。
〔論著〕
「一九七〇年代陝西省出土殷周青銅器」實踐國文學第
24号・「明治時代の書教育の実状」實踐國文學第
26号・「春洞先生の大懶」書品第289号・「道因法師
碑を習う」(玄社中国書法ガイド37)・「筆圧と速度
墨特別号」・篆書のレッスン・基本用筆をマスター
しよう」墨174号。

たからで、金文ということは判っていたが、恥ずかしい話その内容は全く解っていなかつた。

いよいよ本格的な書の勉強が始まった。と

思つたが、折帖に二折れ分十二文字を眼の前で書いていただき、それを次回までに書いて来る。最初に篆書の筆法についての説明はあつたが、何枚練習しろも無いし、書けてな

いから怒鳴るでも無いし、チンパンカンパンの話は長いしで、

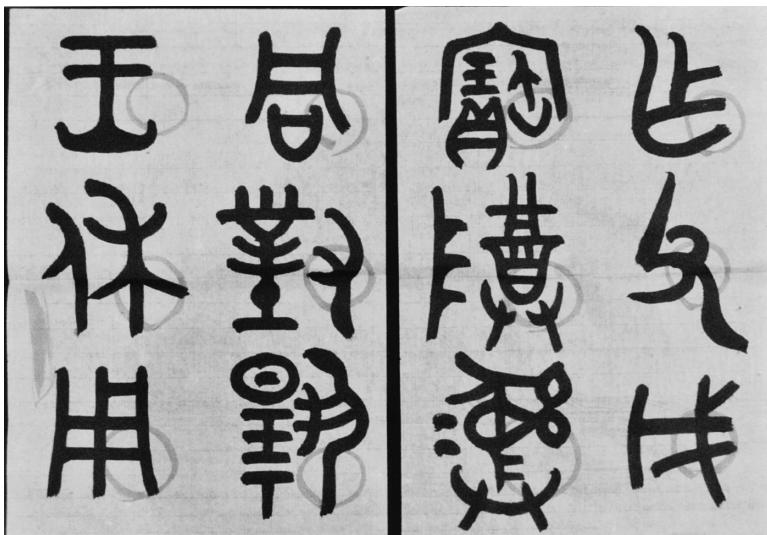
「俺は金文をガンガン書きたい。書けるようになりたいんだ

！」

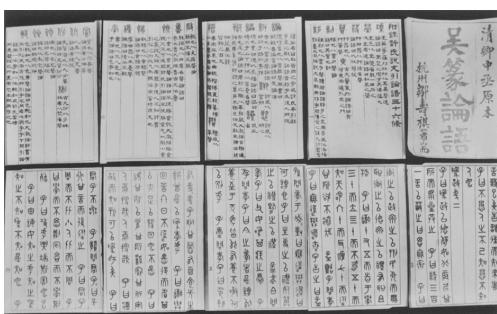
更に錬成会も合宿も無いという具合で不満一杯だった。



「金文集」



西川先生による最後の半紙添削



「篆文論語」



「篆文孝經」

三ヶ月近くが経った。金文が書けるようになりたい気持ちが練習だけはよくさせてくれた。殆ど毎日のように半紙に向かった。一日何枚書いたかは憶えていないが、当時の「一締」を一ヶ月で使ってしまうことがあって、貧乏学生にとっては次の半紙が買えず困ったことを記憶している。

三ヶ月近くが経った。金文が書けるようになりたい気持ちが練習だけはよくさせてくれた。一日何枚書いたかは憶えていないが、当時の「一締」を一ヶ月で使ってしまうことがあって、貧乏学生にとっては次の半紙が買えず困ったことを記憶している。

II 古典との出会い

大学入学手続きをした日に、駄目もとで合格祝に二玄社出版の『書跡名品叢刊』（一二五冊）を母親にねだった。意外なことに即答でOKになった。十日後には届いて、一举に一二五人の恋人が同棲する思いであった。

翌四月には、これも必要だろうと、独自の判断で平凡社出版の『書道全集』（二八卷）もアルバイト代で求めた。

『書跡名品叢刊』の解説を順次読み始め、解らないところは『書道全集』で補いつつ、夏休みが終わる頃までには一通り眼を通した。このお蔭か、西川先生のチンパンカンパンだった話、ゴダイチョウ・カクサイシッコロク・ゲンゲン・ホクヒナンジョウロン・カンピ・モッカン等が吳大澂・翁齋集古錄・阮元・北碑南帖論・漢碑・木簡と判るようになり、その内容も少しずつ見えるようになった。

この時代にインターネットが普及していたらなあ。随分と時間短縮ができたことだろう。と今ながら恨めしく思う。

その名品叢刊の中でも『金文集一～四』は殊の外お気に入りでよく可愛がっていた。毛公鼎は「三」に折り込みで入っていた。その頁を開け、折り込みを開く度にドキドキした。先生の折帖を手本に書いていたが、何時のためにか折帖と折り込みの毛公鼎との両方を見て臨書するようになっていた。添削時の○も増えるようになつた。この頃だったと思うが、先生より「吳大澂のように塗るように書いたら如何です。篆文論語や篆文孝經は参考になりますよ」というアドバイスをいただいた。

III 形臨・意臨

『篆文論語』『篆文孝經』は遙か昔に出版された本で容易に入手できるものではなかった。たまたま所蔵されている先輩がいてお借りできた。今のようにコピー機が身近に無かつたので全頁写真に撮って、工業用の安い印画紙に、学校の暗室を利用して焼いた。そんな程度でも大いに役立った。それが高じて、後に吳大澂の対幅を持つまでになってしまった。

吳大澂の金文を参考にするようになって半

年程が経った頃、今度は「金文の味わいには、印々泥（印もて泥に印す）錐畫沙（錐もて沙）」元々は臨書の説明に使われた語句だと思うが、

くれたようにも思う。

その時に書物にある形臨・意臨が浮かんだ。実例を以って理解できた気がした。つまり、形も意も備わって初めて臨書になるということ。

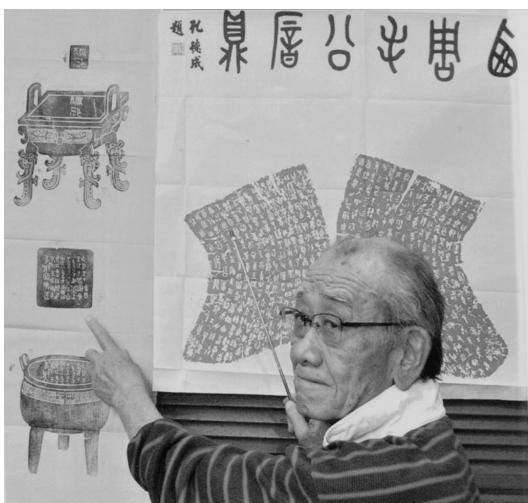
最近やたら形臨・意臨の語句を使う人がいるが、書いていない時の言い訳の道具になっているようで残念である。



吳大澂対幅

IV 書は書くことから

これが私の古典学習の始まりです。只々書く。一生懸命夢中で臨書する。書はそこから出発する。理屈は後から生まれて来る。ともあれ先ずは必死で書くことからですね。



金文説明